

《海外研究室事情(17)》

Osservatorio Astrofisico di Arcetri

アルチェトリ天文台 (イタリア共和国)

<http://www.arcetri.astro.it/>

今日、自然科学博物館として知られる、Specola^{脚注1}にアルチェトリ天文台の起源は求められる。Specolaはエトルリア国王により^{脚注2}、1807年に創設された自然科学の研究教育機関であり、フィレンツェの城壁内にあった。しかし、城壁内からの観測の限界を悟ったDonatiは、当時世界第二位の口径を誇った28.4cm望遠鏡^{脚注3}を含め、標高180mのアルチェトリの地へ移設、天文台を開いた(1841年)。ここに、今日の天文台は産まれた。時は下って1960、70年代、電波天文学の揺籃期に口径2m、5m、10mの3台の電波望遠鏡が活躍し、1.4/9.3GHz帯での電波干渉計観測が行われていたことは述べておきたい。

フィレンツェを囲む城壁をローマ門から出よう。正面に見えてくるメディチ家の別荘のひとつ、ポッジョ・インベリアーレを右に見ながら丘を上れば、天文台に着く。幾重にも連なる、なだらかな緑の丘にはオリーブの木が似合う。向かいの丘からは、ガリレオ・ガリレイが亡くなるまで過ごした家が静かに僕らを見守る。

フィレンツェはルネッサンスの大輪の花である。今も街の区画は当時と変わらない。そればかりでなく、街のそこかしこに、鋭く優美で、熱に浮かされた、そして時に憂鬱で地獄にも成り得る15世紀のフィレンツェが生きている。古代ローマ文明は確かに偉大であったが、所詮、古代ギリシアの模倣である。決して本物を越えることはできない。だからこそ、ルネッサンス以降のイタリアの歴史こそが本物なのだ、との強い自負がFiorentino(フィレンツェ人)にはある。そのルネッサンスの

精神から逃れ、この街に生きることは何人にもできなからう。知らず知らずのうちに、ミケランジェロやコジモらと語り合うことになる。「生きるとは何か」、「科学者として、かくあるべきか」を問い続ける自分に気がつくのである。

アルチェトリ天文台の今日の研究内容についてはwebページをご覧頂ければよいので、頁を割かない。理論から観測まで、世界をリードしているそうそうたる顔ぶれに気づかれるだろう。私は「星形成グループ」のポスドク研究員として、昨春フィレンツェへやってきた(最近、契約が2003年春までの計3年に延長された)。これまで集中してきた低質量原始星の観測的研究(一部を2月号の天文月報に寄稿した)に加え、大質量星の進化の研究プロジェクトにも参加している。

日本で言えば国立天文台に相当する天文台がイタリア各州にあり^{脚注4}、トスカナ州にあるのがアルチェトリ天文台である。実際には、フィレンツェ大学天文学科、CNRと呼ばれる研究機関^{脚注5}に所属する人を含めて、約60人の天文学者、各20人の技術スタッフ、事務職員、大学院生及び学部生^{脚注6}の計120名が常駐する。天文学者の4割が女性(年齢分布に大きな偏りはない)、さらに4組の夫婦の天文学者がいる。これらはイタリアの天文台の中では突出した数字ではないらしい。

情熱的でおしゃべり好きのイタリア人に囲まれての毎日は、文句なしに楽しい。しかし、あまりにも彼らが陽気すぎて!一緒に仕事をしていると、夕方には私だけ、へとへと。底抜けの明るさだけなら、まだいい。ここは世界に知られたイタリ

いつも私のペアの技術スタッフに、イタリア語しか話せない人を“ご丁寧”に割り当ててくれる。「イタリア語の練習のためだ」とにっこり笑いながら。

さて、日本の若手の皆へ。海外へ出よう。天文学はもちろん、貴方の人間の大きさを広げてくれるのは間違いない。英語圏にこだわる必要はない。世界の若手と position を競い（それは、貴方の自信へもつながる。日本では評価されなかった、貴方の一面が評価されるかも知れない）、グループの一員として責

任を果たし、その国の言葉を覚え、その国の通貨で給料をもらい、その国に税金を納める。日本の機関から給与をもらい派遣される“ビジター”研究者には、決して見えない世界へ飛び込もう。ひとりで涙を拭う夜も必ずある。それでも、その涙を補って余り得る感動が貴方を待っているはずだ。

最後に、最愛の伴侶、新永浩子（中華民国・中央研究院）に「ありがとう」を伝えることを許してほしい。彼女の深い愛と理解がなければ、ユーラシア大陸の東西に離れての生活は、そもそも成り立たなかったはずなのだから。

古屋 玲

（アルチェトリ天文台・ポスドク研究員）



仕事仲間の共同研究者、技術スタッフとアルチェトリにて。左から D.パネッラ、私、F.パラージ、L.テストイ、R.チェザローニ、残念ながら、この日は、私の良き相談相手でもある M.ウォルムスリー教授は不在だった。

ア！ 怒りを乗り越えて笑い飛ばすしかない、能率の悪さと気まぐれが、あなたを待ちうけている。それでも、この国のおおらかさと時間の流れに慣れてしまえば、逆に日本社会が怖くなる。

天文台の技術スタッフや事務職員の半数は英語を話せない。そもそもイタリアにいるのに英語を話すのは失礼だ、と一念発起してイタリア語の集中クラスに行った。バスの待ち時間やトイレで動詞の活用を必死に覚える。ちょっとでも、イタリア語が話せると、とても楽しい。アルチェトリ天文台は、ポローニヤ近郊にある 32 m 電波望遠鏡（受信可能周波数は、1.4 から 23 GHz）の運用に参加し、1987 年以來、水蒸気メーザーのモニターをしている。私も観測チームに加わった。ボスは、

脚注 1：手元の辞書によれば、Specola は天文台、望楼の意。実際には、天文学だけでなく医学、動物学、鉱物学などの計 7 部門から構成されていたらしい。Specola とガリレオの活動に関連はない。なお、本文中のイタリア語からの訳は、すべて筆者による。

2：16 世紀から続いたトスカーナ大公国の終焉は 1801 年。エトルリア王国となるも、1804 から 1805 年にかけてナポレオンの支配下におかれる激動の時代だった。

3：レンズこそ交換されたが、アルチェトリ天文台に現存する。

4：それぞれは独立の組織である。

5：ドイツのマックスプランク研究所のイタリア版とも言うべきか。

6：イタリアの大学（入学は 19 歳）では、（物理系では）4 年かけて Laurea と呼ばれる課程を修了する。修士課程は存在しない。Laurea に続いて、3 年間の大学院課程を終れば、めでたく博士（Dottore di Ricerca）となる。Laurea の卒業論文の水準は、日本の修士論文並みかそれ以上である。